22

名古屋大学医学部の濫觴

高橋　昭
名古屋大学名誉教授

江戸徳川幕府の二百余年にわたる鎖国政策から突然開国した明治初期には、戊申戦役（慶応四年～明治二年）、西南戦争（明治十年）などの内戦で経済的には疲弊の底にありながらも、怒濤の如く押し寄せた西欧文化の導入は日本将来の重要課題であったに相違ない。

名古屋大学医学部の前身は、明治四年名古屋藩により設立された仮医学校、仮病院に遡に遡る。設立までの経緯や、明治四年七月の廃藩置県、十一月の学制改革に伴う二回の閉校の歴史に関しては、ほとんど知られていない。ここに、その創設や運営に貢献した四人に焦点を絞り報告する。

一．徳川慶勝

尾張名古屋藩第十四代、第十七代当主の慶勝は、武力とともに教育機関の整備を重視した。教育として、従来の漢学中心から、皇学（国学）および西洋を念頭に置いた教育の充実、医学への変化を図った。明治四年建議の五条を発布し、その第一条に地方学校の整備を命じた。

明治三年十一月頃徳川慶宣（慶勝の子）が原因不明の病に罹患しており、漢方医による処置を受けていたものの治癒しなかったため、江戸から松本順が招かれ、その治療に当たったところ、十五日で改善したことがあり、これが慶勝の心を大きく動かしたことが考えられる。

明治二年六月、藩籍奉還に伴い、尾張藩は名古屋藩と改称した。

明治四年八月八日に、名古屋藩は「名古屋藩元評定所」に仮病院を設置し、九日から開業する旨布告した。名古屋大学医学部の発祥である。

徳川慶勝による病院布告には次項の伊藤圭介らによる建議が大きな動機となった。

二．伊藤圭介

楢林宗建によりわが国に導入された種痘は各藩に急

速に普及した。尾張では、奥医師見習であった伊藤圭介が、鈴木容蔵とともに名古屋城近くの大津町（現名古屋市中区錦三丁目）に種痘所を設けた。明治三年八月頃、伊藤圭介は旧奥医師の石井隆庵、中島三伯とともに、自らが主宰していたこの種痘所を中心にして洋医学校の設立を名古屋藩に建議した。

三．井関盛艮

明治四年七月十四日廃藩置県の詔書が出され、名古屋藩は名古屋県となり、医学校は廃止された。名古屋県が復活を布告したが、直後の十一月に学制改革がなされ再度廃校となった。十一月十二月十二日から権令として井関盛艮（いせきもりとめ）が任命された。翌明治五年四月二日、名古屋県は愛知県と改称され、井関が引き続き権令の役に当たった。

井関は旧宇和島藩士で、慶応二年藩命により長崎に行き、坂本竜馬・本木昌造らと知己になり、海外事情にも通じていた。アーネスト・サトーから高く評価された人材であった。

井関は廃藩に伴い廃校の運命に曝された旧藩立の医学校を私見によって県下の豪商などに呼びかけ、資金を調達して医学校の復活に努め、「義病院」を仮設した。これは第二代県令鷲尾隆聚の時代になり、明治八年、西本願寺別院に病院を再開、翌七年には公立医学講習所として復活、以後たびたびの改称と昇格を経て、今日の名古屋大学医学部へと変遷した。

四．後藤新平

明治十年、愛知県公立病院・医学校が天王崎町に新築移転した。須賀川医学校で医学を学んだ後藤新平は、明治九年八月に着任、同十四年には校長・病院長に昇任した。同十五年に文部省通達第四号により医学校が甲・乙の二種に大別された時、後藤は人材確保に奔走し、学科基準を満足するよう努力を重ね、文部省令の基準を満足させ、甲種医学校の認可を得た。名古屋大学医学部の基盤はこの時にでき上がった。